

別記様式(第5条関係)

会 議 録

会 議 の 名 称		令和7年度第1回福津市教育懇話会
開 催 日 時		令和8年2月19日(木) 午後 6時00分から 午後 8時00分まで
開 催 場 所		福津市役所 本館2階大会議室
委 員 名		(1)出席委員：伊藤 克治、春田 久美子、児島 由美、木本 圭子、安德 尊博、中山 真一、久壽 真一 (2)欠席委員：白土 真二郎、増井 久美子
所 管 課 職 員 職 氏 名		薄教育長、宮原教育部長、原尻理事兼主幹指導主事、佐々木教育総務課長、志賀新設小学校準備室長、石井学校教育課長、芹野郷育推進課長、芹野文化財課長、鶴口主幹兼指導主事、木村指導主事兼教育指導係長、内兼久総務企画係長、古沢主事、業務受託事業者
会 議	議 題 (内 容)	・福津市教育懇話会について ・新しい教育大綱について
	公開・非公開の別	<input checked="" type="checkbox"/> 公開 <input type="checkbox"/> 非公開 <input type="checkbox"/> 一部公開
	非 公 開 の 理 由	
	傍 聴 者 の 数	2人
	資 料 の 名 称	・令和7年度福津市教育懇話会(第1回)当日要項 ・教育大綱と教育総合計画について ・新しい教育大綱の策定について
会 議 録 の 作 成 方 針		<input type="checkbox"/> 録音テープを使用した全文記録
		<input checked="" type="checkbox"/> 録音テープを使用した要点記録
		<input type="checkbox"/> 要点記録
		記録内容の確認方法：会長による確認

<p>その他の必要事項</p>	
<p>審議内容（発言者、発言内容、審議経過、結論等）</p>	
<p>1. 開会行事</p> <ul style="list-style-type: none"> ・挨拶 (薄教育長より挨拶) ・委嘱状交付 (薄教育長より委嘱状を交付) ・会長と副会長の選出 (委員の互選により伊藤会長・児島副会長を選出) ・自己紹介 (委員より自己紹介) (宮原部長より事務局職員の紹介) ・日程について (佐々木課長より説明) ・会議録確認委員の指定について (伊藤会長を指定) ・挨拶 (伊藤会長より挨拶) <p>2. 説明及び意見交換</p> <ul style="list-style-type: none"> ・福津市教育懇話会について (佐々木課長より別紙を用いて説明) <p>(伊藤会長) 何か質問はあるか。</p> <p>(春田委員) 教育懇話会で審議する教育総合計画は、教育大綱に基づいて策定するということがあった。教育大綱は、すでに策定されているのか。</p> <p>(佐々木課長) 教育大綱は、3月10日に開催する総合教育会議で最終調整を行い、令和8年3月に確定する。確定する前の段階で、ご意見等あれば伺いたいということで本日会議を開い</p>	

ている。

(伊藤会長)

特に委員の皆様には、教育総合計画の全体スケジュールを把握してほしい。

令和9年3月末に第3期教育総合計画を策定完了する予定であるため、その前の1、2月に市民意見公募、その前後に議会や教育委員会、庁議への提出となる予定である。

そこから逆算すると、教育懇話会では、10月末までに4回程度審議した上、取りまとめとなる。その後パブリックコメントを受け、場合により修正し、3月末に正式決定となる。

教育懇話会で計画を審議するときは、白紙からではなく、原案に対して意見を出して審議するのか。

(佐々木課長)

業務委託による事業者と共に作成していき、ある程度たたき台がある上で、審議してもらうことになる予定である。

・新しい教育大綱について

(宮原部長より説明)

(原尻理事より別紙及びパワーポイントを用いて説明)

(伊藤会長)

教育大綱は市長が策定するものと説明があったが、教育懇話会では、教育大綱を具現化する計画を策定していくこととなるため、教育大綱をよく理解することが大切となってくる。

説明を聞いた上で、何か質問や意見はあるか。

(久壽委員)

2回のワークショップで、資料にある「ワークショップで出された市民の声」というのが出てきて、そこから現状把握し、課題を出して対策をまとめてあり、大変素晴らしいと思う。

(伊藤会長)

私もワークショップへ出席した。目指すものを共有し、そこに行き着くために何ができるかというワークショップであったので、意見が出やすく、このような具体のアイデアがたくさん出たのではないかと思う。

計画の作り方で、活動が目的になることが一番良くないのだが、今回は、目指すところを皆で共有しており、これまでの福津市の多種多様な価値ある取り組みの成果であると思う。

委員の皆様のご共通する思いもあれば、それぞれの立場からの思いもあると思うので、自由に意見を出していただきたい。

(木本委員)

福津のここまでやってきたものが活かされているからこそ、出てきたものがたくさんあるような印象があり、大筋としては大変良いと思う。

資料の「意見から想定される方針案」は、ワークショップで出された市民の声などからピックアップし、今後、福津市の教育の中で特に重点的に頑張っていければと思う部

分が示されているので良いと思う。

4つの視点は、「ふるさと」と「学ぶ」の「てにをは」で全て表現しなければならないのか。

(原尻理事)

市民が見たときに、なるほど腑に落ちるかなど、わかりやすさについて、総合教育会議でも意見が出ている。何をしたら良いかという方針ではなく、自分たちはふるさとを大事にする、ふるさとを大事にしてくれる福津の教育であると掲げるときに、スローガンのような言葉があるとよいのではないかということで、まず「ふるさとで」、「ふるさとを」、「ふるさとと」「ふるさととともに」が出てきた。

(木本委員)

環境、探究、共育というのは、腑に落ちる。愛着という視点は、大変良いと思う。

ただ、「てにをは」で表現するのは、少し無理があるように感じる。私達がわからなければ、おそらくパブコメで、なぜこうなるのかという声が市民から出そうな気がする。

例えば、探究は、ふるさとを深く学ぶということであると思うので、日本語的な感覚からいくと本来なら、ふるさと「を」の方がよいと思う。愛着は、「学ぶ」を無理やり使うのではなく、「ふるさとを愛する」など動詞を変えるとよいのではないか。

「ふるさと」が頭にくるのは良いと思うが、動詞が全て「学ぶ」になると、市民の方が読んだときに、キャッチコピーに違和感を感じ、かえって損になるような気もする。

(伊藤会長)

木本委員と同様な考えである。皆がすぐにわかってこそそのキャッチーな言葉であるので、それはどういう意味かと言われた瞬間、普通の文章で書いた方が良かったことになる。苦しいキャッチーな言葉は、使用しない方がよい。

「学ぶ」だけというのも、若干違和感がある。学んでどうなると良いのかという問いが出るので、例えば、このようなことを学んだ結果、ふるさとを生かすなどとするとよいのではないか。

今回、全体的にプロセスを大事にしており、「学ぶ」というところだけでは範囲が狭いように感じる。キーワードは、「創る」であり、「学ぶ」だけで「創る」に繋がるのかというギャップが気になるので、そこに繋がるキャッチーな要素があればよいのではないか。

(児島委員)

「ふるさとと学ぶ」、「ふるさととともに学ぶ」は、わかりにくいと思った。木本委員の考えに賛成で、動詞を変えてもよいのではないか。例えば、郷土愛は「ふるさとを愛する」、探究は「ふるさとを創る」、共育は「ふるさとと育ち合う」はどうか。「学ぶ」で揃えるのであれば、共育は「学び合う」に変えるのはどうか。

教育大綱の4つの視点から、教育総合計画へ移していくときに、すみ分けが重複している部分を明確に整理した方がよいと思う。例えば、『「探究的な学び」への変革と「社会参画」』に、総合的な学習の時間について記載されている。『「郷土愛」の醸成と「未来の担い手」の育成』にも、地域の人的・物的資源を活用したふくつの学びの実装とあり、目的は違うかもしれないが、同じふるさと学習に関することが示されている。計画を作るとき、2つに跨るとややこしくなるのではないか。

4つの視点の順番について、郷土愛を一番上にするなど、順番もこだわった方がよい

のではないか。

(伊藤会長)

4つの柱は、階層のようなもので、場所が違うものと感じている。4つの視点を自由に配置するとしたら、郷土愛がゴール像のように一番上にきて、そこに向かうために、環境を整え、その環境の中でこのような共有があり、その共有の中で、この探究があるというようなイメージである。並べるといよりは、階層のようなものの方がわかる気がする。共有イコール探究ではなく、共有の中に探究が包摂されると思うので、それぞれの探究的な学びと、共有を独立するのは中々難しい。探究のプロセスを考えると、多様な他者と共働していくので、共有は必ず一緒に入ってくることになる。

計画の各施策が、教育大綱の柱にぶら下がっていくとしたら、重複することは気になる。

(久壽委員)

「共創」、「共有」、「郷生」があって、4つの視点があるのであれば、目指す姿を明示するべきと思う。こうなりたい、環境はこうしたい、共有はこうしたいなど、「共創」、「共有」、「郷生」に繋がる、あるべき姿を見せることができれば大変わかりやすいと思う。

(伊藤会長)

「共創」、「共有」、「郷生」は、主題やゴール像なのか。これは、サブで、この上に目標とするものがあるようにも見えるし、これ自体がゴール像のようにも見える。

(原尻理事)

ゴールというよりも、教育大綱の評価項目のようなものとしてあげている。

(伊藤会長)

これが目標でないということであれば、目標像があって、それに向かってこのような柱でいくということか。目標のように見えなくもない。

(原尻理事)

誰もが未来の福津の創り手になっていくことを大きなテーマとして最初から今まで掲げている。未来の福津を創る、担う子どもを育てようというところから始まり、それは子どもだけではないのではないかと出てくる中で、誰もが未来の福津の創り手になっていこう、いわゆる自分事、当事者意識を持った人間を育てるための教育大綱というところは、最初からずっと続いている。

(久壽委員)

それがイメージできたら、市民がこんな福津市にしたい、そのために、「共創」、「共有」、「郷生」があるということで大変わかりやすい。

(伊藤会長)

目的があり、その達成のために、「共に創り」、「共に育ち」、「郷に生きる」があるということと同感。

(木本委員)

「共創」、「共育」、「郷生」の「郷生」に関して、「郷育」は全国で福津しかなく、「郷」を「ごう」と読むのは、毎回ふりがなを振らないと読み方がわからないくらい。やっと浸透してきたところであるのに、今度は「きょう」と読むのかと思ったところもある。

先程の「てにをは」もだが、策定の目的として、この造語のような言葉を使わなければならないわけではないのであれば、「共に創り」、「共に育ち」、「郷に生きる」の方が、誰が聞いてもわかりやすいのではないかと。

(伊藤会長)

基本理念に近いキーワードになっている。このキーワードを使って基本理念を示すとわかりやすいと思う。

(久壽委員)

漢字のみで表記する必要はないと思う。

(春田委員)

他自治体の教育大綱と比べ、福津市の教育大綱の特徴的なところはどこか。

(原尻理事)

一番は、大人の学びに踏み込んでいるところである。

本日配布した資料では、あくまで教育大綱の策定過程を記載している。

教育大綱では、「福津の未来の創り手を育む」という大きな目標があり、その目標を達成するために「共に創る」、「共に育つ」、「郷に生きる」があり、そこに方針案として4つ、5つ示すという構成になる。

(伊藤会長)

この資料は、あくまでも教育大綱そのものではなく、策定にあたるこれまでの検討プロセスの紹介である。教育大綱の完成版では、おそらく基本理念が一番にあり、方針、目標、個別の取り組みの柱などという順番になるのではないかと。

(春田委員)

ワークショップが大変良かったということであれば、例えば、福津市内にある小・中学校の全ての子どもたちに、授業としてこのようなことを考えてもらう時間を作り、そこで同じようなワークショップをしたり、PTAの集まりで、ワークショップをしたりできると、さらに色々な視点が出てくるのではないかと。

印象として、「ふるさと」がとても強調されているような気がする。

日本の子どもたちの今後の教育の方向について、色々情報を把握していく中で、地元愛は大事であると思っているが、今、留学へ行く人も減り、日本全体が内向きになり、グローバルな社会で日本の競争力が落ちていると感じる。日本の外交力をどう高めるかなどということが話題になったりする。

最終的に、福津の担い手を創るだけではなく、日本や国際的な中で、社会全体の課題を解決できるような人たちを福津で育てたい、福津でそういう教育ができれば素晴らしいというような視点もあるとよいのではないかと。

教育大綱の対象者は、基本的に小・中学校での教育のことか。

(原尻理事)

全市民、全世代が対象である。

(伊藤会長)

学校に特化したものは、ドリームプランや各計画で具体化されるのではないかと思われる。

(春田委員)

子育て世代の転入などが増加している中で、教育で選ばれる、教育で呼べるようなまちになるとよいのではないかと思う。

国際バカロレアという、世界にのし上がっていけるよう目指す国際的な教育プログラムがあり、九州ではその例が少ない。四国や大阪では、公立学校でも国際バカロレアのプログラムを持った学校ができ始めている。

「ふるさと」も大事であるが、そこから飛躍して日本全体や国際的に活躍できる人材を創っていけたら素晴らしいと思うため、そのような視点も入れられたらよいのではないか。

(伊藤会長)

国際的に活躍する人材を育成するには、自分のふるさとや、日本のことをわかっていないといけないと思う。福津から外に出たとしても、この福津というふるさとで育ったというマインドを持っているからこそ、それを生かして、国際的にも仕事ができる。大人になって、福津にいても、外に出ても、福津で身につけた力を発揮し、次の持続可能な社会の創り手になっていくのであるというような説明を教育大綱の最初にしておくとよいのではないか。

国際バカロレアなど具体の教育を通して、こんな子どもを育てるなどということは個別の計画に、落とし込んでいくことになるだろう。

教育大綱では、目指す姿として理念、それに繋がる基本方針や目標、柱があり、そこについて議論していきたい。

(中山委員)

この資料が、教育大綱なのか。

(佐々木課長)

教育大綱は、これからの教育施策について、基本的な理念、方針、目標を示したものとなる。この資料は、教育大綱ではなく、教育大綱を策定する方法や、方向をまとめていく経過を説明しているものである。

(伊藤会長)

この資料は検討プロセスの紹介のようなもので、教育大綱となるわけではないからこそ、現段階で色々意見を出していくことができる。

(児島校長)

現行の教育総合計画の11ページに、教育大綱について記載してあり、このようなものが今回、教育大綱としてできあがるイメージなのではないか。

(久壽委員)

理念は、現行とあまり変わらないのではないか。

(伊藤会長)

理念は、基本的には大きく変わることはないのではないかとされる。

Society 5.0の時代で、距離や時間の制約を超えて世界と繋がれるとすれば、春田委員が言われたグローバルな視点は、方針や説明の中に入れる必要があるのではないかと思う。

(安徳委員)

ワークショップで出た声から、ここまでまとめて創り上げられており、すごいと思う。

大人も子どもも共にということ、中学生、高校生も参加しており、春田委員が言われたように色々な学校でワークショップができれば面白いだろう。

保育、乳幼児という世界の立場として、教育大綱を絵で表すとしたら、子どもから中学生、高校生、大人になり、また子どもをもつということ、一直線というよりも循環するサークル型にあるのではないか。

郷土愛である家族の愛、家族の中で自分らしくいられる場所、自己肯定感が根っこにあることで、みんなが生き生きと元気に自分らしくいられる。自分が自分を大切にしているから、人を大切にできるという根っこがあり、家庭、地域からふるさとを愛するところであり、友達も大事にすることでインクルーシブな教育に繋がったり、誰一人を粗末にしないという気持ちが育まれていくのだろうと感じた。

AIで補えるところもあるが、人の教育は、同じ「アイ」でも、愛情の「愛」でないといけない。人の手で関わる部分と、AI技術という便利なものと、同じ「アイ」でも使い方が全く違うので、そのようなところをこれからミックスできればと思う。

対象期間が8年間とあったが、激動の8年間であったと思う。

一般的に、3年、4年で1サイクルと言われる中で、期間を8年間としたとき、時代の変化を受け、途中で流動的に必要なものを盛り込むことができるのか。

(伊藤会長)

現行の教育大綱では、中間見直しはされていない。

(佐々木課長)

現行の教育大綱は、最初4年間で策定され、様々な状況で8年経っている。

今回の教育大綱は、令和8年度から4年間、または5年間程度を考えている。最終的には、3月の総合教育会議で、対象期間を決めていくことになる予定である。

(伊藤会長)

学習指導要領は、10年間で作られ、見直しはないので、8年間で長いととるかどうか。今回のような自治体で策定する場合は、中間見直しは行った方がいいと思う。

現行の期間では、新型コロナウイルス感染症を挟んで激変しており、デジタル環境はAIの登場で、大きく社会を変えた。

(児島委員)

現行の教育大綱で、安部清美先生の概念が載っているが、今回の教育大綱で、市長は安部清美先生の概念を大切にしようという考えはあるか。

(原尻理事)

市長は、教育大綱を策定するにあたり、最初に、神興東小学校の安部清美記念館を見に行かれたので、そこは必ず入るのではないかと考える。

(伊藤会長)

安部清美先生の概念は、普遍的なものとして入れてほしい。

(児島委員)

「一人の子を粗末にする時 教育はその光を失う」の方が、馴染みがある。

(伊藤会長)

同じく気になった。誰1人残さないインクルーシブ教育は、大事にしないといけない。

『「未来の担い手」としての探究心と郷土愛の育成』とあり、この部分のみ「担い手」という言葉を使っているが、「創り手」に揃えた方がよいと思う。学習指導要領は、『持続可能な社会の創り手の育成』となっている。

キャッチーな言葉は、要検討と思う。「ふるさとで学ぶ」、「ふるさとを学ぶ」など、これについて総合教育会議でも意見があったが、どうか。

(久壽委員)

「ふるさと」という言葉を残したいのか。

(原尻理事)

市長の考えの大元に、「ふるさと」がなくなっていくのが一番怖いというのがある。市長自身は、あまり大きくないまちで生まれ育っている中で、平成の大合併により、大きなまちへ変わり、自分たちが過ごしてきた場所で、大人になっても生きていくことが、中々叶わないことになったということ言われていた。福津はそうではなく、子どもたち、自分たちが福津で育ったからこそ、世界に羽ばたいたときに、福津のマインドを持っていくという考えがあり、それを端的に表す言葉として「ふるさと」が出てきているという市長の思いである。

「ふるさと」という文字をキャッチーに出していくため、最初は、強調していたが、総合教育会議でも、ふるさと「が」、ふるさと「を」などは、わかりやすい部分もあるが、委員の皆様が言われる通り、それにこだわりすぎると引っ張られてしまい、まとまりが悪くなるのではないかという意見があった。

実際、福津のコミュニティ・スクールで育った子どもたちが、福津を出たときに、福津では当たり前であったことが、他のまちの子どもたちはそのような経験をしていないこともあり、衝撃を受けたという声もある。例えば、ふるさとで地域の方が毎日声をかけてくれるのは当たり前と思っていたが、意外とそうではなかったことであったり、津屋崎に住んでいる子どもが、山笠の歴史について聞かれたら答えることができるのに対し、自分のまちの祭りのことを聞かれても、わからない人がいるのが、残念に感じ、自分たちは恵まれているなど思うことであったり、このようなことは高校生がよく言っている。

ふるさとを大事にするからこそ、グローバルに繋がっていき、福津だからこそ出せるワードではないかというところはある。

(伊藤会長)

教育大綱は、福津で育ったからこそこんな子ども、市民が育つということで、最終目

標は、福津だけで閉じてはならず、ワールドワイドに考え、そのようなマインドを福津で育てようとするのとよいのではないか。

そこを説明しておかなければ、福津だけで囲い込んで、そこで大人になって、子どもが育っていくというような福津の中だけでの循環に見えてしまうので良くない。

春田委員が言われたことは、こういうことか。

(春田委員)

そうである。

(伊藤会長)

同感である。

(木本委員)

福津で育った子どもたちは、多様な体験活動をしており、大人との対話の機会も多い。例えば、学校で行われるトークフォークダンスで、福津の自慢は何かという話題では、「海」と「イオン」がよく出る。子どもたちは、色々わかっているとは思いますが、直感的に「海」と「イオン」が頭に浮かび、そこから掘り下げたものに中々ならないこともある。

資料の『「子どもをどう変えるか」ではなく、「大人も子どもも共に育つまち」へ』は、社会教育の立場としても良いと思う。大人が学んでいる背中を見る子どもたちは、刺激になると思う。勉強しなさいなど、ただ指示だけ出すのではなく、努力をしている大人の背中を見せるという意味では、ここはとてもキーワードになると思う。

資料の『「行政が作ったもの」ではなく、「自分たちが関わって創ったもの」であるという実感』は、大事にしていきたいと思う。

教育総合計画で、具体的に施策として落とした方がいいのかもしれないが、福津をよく知り、自慢だと思えるような感覚があった上で、外に出て活躍できるグローバル、ワールドワイドな人材や、外向き思考の文言が入ってくるといいのかもしれない。

ふるさととは、とても大事で、それを入れた上で、ふるさとだけの囲い込みではなく、外に出ていけるような意識を持たせるという両方が入ってくるとよいのではないか。

私は、福津に住んで40年近いが、地元は別のところで、地元がどういうところかや、地元を人に薦めたい気持ち、地元のよさは、今もよくわかる。

色々なものがオンラインで世界と繋がるからこそ、自分の足元が見えなくなる感覚があると思う。そのような中でも、福津で育って良かったと思えるような子どもたちにしていければよいのではないか。

個別最適な学びと、多様な居場所の充実という面で、学校に来ていない子どもの割合が、かつてとは比べ物にならないぐらい増加している。学校に行くことができるに越したことはないのかもしれないが、広い間口で包括的な施策を出していくことも大事にしていなければならないと思う。

(伊藤会長)

資料の『「子どもをどう変えるか」ではなく、「大人も子どもも共に育つまち」へ』をキャッチーに言うのであれば、「子どもをどう変えるか」ではなく、「子どもがどう変わるか」ではないか。「子どもがどう変わるか」と言うと、子ども主体で、そのために大人が支援するという意味になるだろう。

キャッチーな言葉は、難しい。教育大綱が、キャッチーな言葉で市民に伝わるのであれば、スローガンのものとして使えてよい。

総合教育会議では、「ふるさとで」、「ふるさとと」の部分以外に何か意見ができたか。

(原尻理事)

総合教育会議では、子どもの視点だけではいけないのではないか、「共創」、「共育」、「郷生」は、あくまで評価していくためのものであり、そこに対してどうしていくべきか整理する必要があることなどが出た。

「ワークショップで出された市民の声」は、かなり精選して40個にまとめているが、ふるさとから羽ばたいていく子どもを育てる必要があること、どこでも学べる環境が必要であること、枠にはめるのは、いけないのではないかということ、大人がどうしていくのかということなどが出ており、様々な場面で、委員の方々が今言われたようなことが出てきている。

それを「ふるさとで学ぶ」などの4つの視点でまとめているが、ほかの形で整理するとまた見え方が違ってくるだろうと思う。今は、整理の仕方をどうしていくか議論している段階であるが、根本にある市民の願いは生かされるので、いただいた意見を基に、また整理した段階で、総合教育会議で検討することになると考えている。

(伊藤会長)

教育大綱にぶら下がる計画を考える教育懇話会として、教育大綱が柱で整理されるのであれば、柱の下にぶら下がる計画の施策の重複がないような柱であると考えやすい。

教育大綱の柱にぶら下がって具現化した計画で、縦串が通ったように見えるため、外から見ても見やすくなる。

整理の仕方は何通りもあると思うが、教育大綱は、市民が見てわかりやすいものになるとよいのではないか。特に、キャッチーな言葉は、聞いて、なるほどとならないものは、なるべく使わない方がいい。

(久壽委員)

視点のキャッチーな言葉は、ない方がよいのではないか。

(伊藤会長)

キャッチーな言葉が視点にあることで、その説明までしないといけなくなるようであれば、使用しない方がよいのではないか。

視点にキャッチーな言葉があって、なるほどとなるのであれば、大変良いが、それはどういうことかとなるようであれば、苦しい。

小学校においては、まさに、1年生から6年生まで全てわかるようなスローガンでないといけないだろう。

(児島委員)

小学校では、まさにそうである。

本来であれば、1つの柱に対し、1つの施策とするのが望ましいが、それは難しいのだろうと感じる。

(伊藤会長)

このような柱で教育大綱ができるとしたら、この視点や基本目標をもとに、取り組みを柱で整理するというように作ることになるだろう。

(原尻理事)

先程言われたような段階的なものとして、最上位に郷土愛があり、理念の中に「共に学ぶ」や、「大人も学ぶ」などがあるという階層的なもので教育大綱に示すというのものがある。

(伊藤会長)

それであれば、そこからぶら下げる必要がないので、それを具現化する柱で進めていくことでわかりやすくなる。

安徳委員が言われた根っこになる部分、郷土愛のようなものや、人同士の関わり、愛情のようなものの上、その畑の上に、大木が育つイメージである。その水やり、肥料やりをすることが、育てるための手立てになるのだろう。

理念を具現化する要素としては、色々出た市民の声が大変よく整理されていると思う。この見せ方の工夫であると思う。

他にないか。

(委員)

なし

(伊藤会長)

今日、教育大綱に関して出た意見により、大事なことなど、委員の皆様が把握できたと思うので、おそらく今度は、それを教育総合計画の項目として整理し、個別の計画での道筋を作っていくことになると思う。

3. 閉会行事

(佐々木課長)

本日いただいた意見を参考にし、まず、市長の教育に対する考えをまとめた教育大綱を策定したいと考える。それを基に、来年度は、委員の皆様と教育総合計画の策定を進めていくこととなる。